

ロングステイといえは、定年後に長期間海外で過ごすと思いがちだが、その国内版ともいえる国内ロングステイも人気だ。京都や北海道、沖縄などに長期滞在し、その地域の気候・風土、歴史や文化に触れ、物見遊山の旅では味わえない魅力を感じる。長期滞在型マンションの増加など受け入れ体制も整ってきた。

## 古都・自然・グルメ：新たな魅力知る

京都市に住む赤羽智哉さん(67)は、益地特有の熱気がもたらす京都の夏に極まされ続けた。夏が終わりと気づき、夏を終わらせた。昨年、ある妙案を考へて移した。

赤羽さんが加入している特定非常利活動法人(NPO)シースネット京都は札幌に兄弟組織があり、さまざまな交流活動をしている。そこで札幌市のシースネットの会員11名をかり、夏の間その会宅に滞在させてもらうことにした。会費以外には、友人宅や温泉旅館などを気ままに泊まり歩き、七月から九月にかけて一カ月半ほどを北海道で過ごす。

夏を過ごせたとし、地元の人と交流できる。一泊か二泊の観光旅行では足りない経験だった。(赤羽さん)一方、札幌のシースネットの会費の間にも、冬の厳寒期を京都で過ごしたいという声があり、二年前に「シシア」国内ロングステイ交流事業がスタートした。京都札幌の会費の中から自宅を開放してもいいという人に登録してもら

# ロングステイ 日本を満喫

週・月単位で住宅借りて…



空き家を改装した宿泊設備を整えた京町家で昔の暮らしを体験できる(京都市)

い、お互いにロングステイ希望者を受け入れる。これまで二十組程の実績があるという。昨年の冬には赤羽さん一家にも北海道から来た七十代の夫婦が、十日間ほど滞在したという。

ロングステイという海外のイメージが強いが、高い船にのった海外生活には何かと障壁が伴う。現地の人とうまく意思疎通できない、食事が口に合わない

い、病時が不安…。このうち生活に必要とする国内で欲求が強まっている。国内の観光地にある宿泊施設ほとんどは、せいぜい二泊か三泊程度の旅行客を受け入れる体制しか整っていない。一週間か三ヶ月に及ぶロングステイの受け入れられる体制も少ない。ホテルに比べ料金も安い。ワンルームなら一泊四千元程度からあり、利用期間が長ければ割安になる。

## 安く快適に

ベッドやテレビ、家具、エアコンといった生活に必要な備品は部屋に備えられているので、到着したその日から生活できる。食費もキッチンも付いていて、ホテルと違い自炊も可能。洗濯機や乾燥機などが別料金で利用できる物件も多い。ワンルームなら一泊四千元程度からあり、利用期間が長ければ割安になる。

京町家体験館「風見邸」ふらっと」を経営するフラットエージェンシー(京都市)の吉田江一社長は「京町の町家は単なる住まいではなく、先人が残してくれた大切な遺産。その保存のためにも町家暮らしの体験者が増えほしい」と話す。「風見邸」の料金体系は、二人利用で一週間七万円、一カ月十八万円(光熱費別)などとなっている。

### 国内ロングステイの目的と主な滞在先

目的	具体的な内容	お薦めロングステイ先
趣味を満喫したい	山登り、ゴルフ、ボーツ、釣り、乗馬、陶芸	山登りには長野、マリンスポーツは沖縄、ゴルフは地方中都市、陶芸は各地の陶器産地など
地方の歴史や文化に触れたい	博物館、美術館、史跡、公園、寺社仏閣、祭り	各地の城下町や歴史の古い都市、全国の小京都、著名な作家や画家などの出身地
マイペースで学習したい	大学の公開講座、市民講座	京都や東京、大阪、名古屋など大学の多い市、市民活動が盛んな地方の中核都市
農業体験がしたい	稲作、野菜・花卉栽培、酪農	北海道などの農村地帯。就業を目指すなら全国新規就農相談センターの体験コースに参加する手も
身体や精神を癒やしたい	避暑・避寒、透明な環境、温泉	夏は北海道・信州、冬は九州・沖縄など。長期滞在施設のある温泉地も
グルメを堪能したい	郷土料理、地方食材、老舗めぐり、酒蔵見学	古くから栄えた街・港町、観光地の近くなど。地方の人にとっては東京が最大のグルメ都市
現地の人と交流したい	ボランティア、NPO交流、環境体験	自治体やNPOなどの体験型プログラムのあるところ。安い方法も公共の宿に泊まる方法もある

くがずれており、比較的空いている。観光客で大混雑する時間帯は至遅で講座を離れ、早朝や夜など混雑の少ない時間帯に出かけるプログラムを提案している(エネルギー倶楽部の大社充理事長)。

JTBは先月初め、東京都中央区に「JTBロングステイアパザ」を開いた。海外はもとが国内ロングステイに関心が高いことに応じ、専門業者が提案して留守宅の管理やペットの世話などもする。

さらには北海道の自治体と手組み「北海道長期滞在型生活体験モニター1」の募集も始めた。道外在住の二十五歳以上、五十歳以下の主婦を対象に、道内八市町村に一月間、生活体験してもらった。宿泊先は公営住宅や生活用品付きアパート、マンションなどで、農業体験やホストトレッキングといったプログラムを用意している。料金は一番安い職員住宅に泊まるタイプで月六千五百円、最も高いが一戸建てのタイプで十七万二千円(いずれも交通費別)。自治体側は将来、体験者の中から定住者を出ることを期待している。この事業を進めるJTBソリュション事業の篠崎宏さんは「国内ロングステイは、定年準備などに移住する人の受け入れに積極的な自治体の関心が高。短期間の民間アパートや古民家や学生した宿施設が増えれば、今後さまざまな地方を受け入れる可能性がある」と語る。(日経マスターズ)